

『国語教育』一九六三年二月（明治図書出版）

■プログラム方式は授業革命をもたらすか

## プログラム方式と国語教育の問題

矢口 新

一

国語教育に限らず一般にわが国の教育方法は近代化の度合いが、低いようである。その理由はさまざまある。一つは近世以来の教育の方式である聖賢の書の講読様式の伝統があることである。何千年来の聖賢の書を師が弟子に講釈し、弟子はうやうやしくこれを聞いて一点たりとも師の教えに違わないことを旨とした。この方式が近代学校における学級一斉の授業と結びついた。これは教育における生徒の活動というものを無視しているといって差し支えない。活動しているのは教師の側であり、教師は結論を聞かせる。生徒は己を空しくしてそれを受けとるのである。

この場合、生徒が如何なる程度の受容力をもっているかを考えないならば、教師の講義は全く一方的になり、生徒には皆目わからないことでもただ言葉を暗記するという形になる。それは封建時代の教育の姿が象徴的によくあらわしている。五、六才の子供が論語、孟子の講釈を暗記させられていたのである。現在は生徒の側の学習の能力を問

題にする考え方がはつきり出ているから、そのようなことはないけれども、しかし学級一斉の授業の形は依然としてくずれないでいる。生徒が活動して自らそれを会得するという考え方はないわけではないが、一斉の授業を破るまでには至っていないのである。

教師が教科書を説明し、それが一斉に同じ事柄として生徒の側に受けとられるという前提は考えてみればおかしなことである。生徒はそれぞれちがった能力をもっているから、反応の早いものもあれば遅いものもある。一斉の内容が一斉に同じ速度で与えられる筈がないのである。一人一人に目をつければ、それぞれが、あちらに迷い、こちらに迷いながら道を歩いて行くのである。一人一人迷うところがちがうから、そこで迷いをとくことが必要である。それが、一人一人が育つて行くことであろう。一斉授業の形では、どうしてもそこへ入れない。教師は様々な生徒がいることを知らないわけではない。だからいろいろなレベルの生徒に問答をしかけて、試しながら授業を進める。しかし学級のすべてに対してそうすることは出来ない。代表者に対してだけである。一人一人を確かめることをやっていたら、授業という集団的活動が間のびしてだらけてしまう。そこでどうしても教師のペースで授業は進められる。いわば教師というスターを中心に、集団の活動が進められるのである。こういう授業を一世紀以上つづけて来て教育という仕事は、教師のスター的活動を中心に考えるくせがついてしまっている。この惰性から如何にして逃れるかが学習指導法の根本問題となっているといつてよい。

ヨーロッパやアメリカが一学級の生徒を三十人に切りさげて、授業の間における教師の活動を一人一人の生徒を見廻ることに切りかえているのはこうした理由によるのである。いわゆる個別指導を徹底するために学級人員をへらしているのである。あちらの授業をみると、

三十人の生徒か一人一人ちがった活動をしている。使っている教科書も生徒によってちがうことがある。教師が生徒に与える教材も、一人一人に応じて与えられる。しかしその間に一定の筋道がないわけではない。みな一定の方向へ向ってあるいているが、それぞれの生徒が自分のペース、自分自身の弱点を発見し、自分をつくりあげる努力をしているのである。

このようになると、一寸みると昔の寺子屋のように極めて能率の悪い授業が出現したように思われる。確かにそういう面がある。そこでそういう事態をどうして救うのであろうか。たとえば誰もが歩かねばならぬ道すじだけは与えられている。つまり基本的な子供のしなればならぬことは与えられている。それに従って生徒は活動するが、そのやり方は生徒のペースにまかせられる、生徒のそれぞれの考え方にまかせられるといったものは出来ないであらうか。ここに、生徒の基本的なドゥーイングをプログラムして生徒に与えようという考え方も必然的に起って来る。かつてドルトンプランなどが考えた方式である。しかしそういう程度のもので、生徒に大きい課題を与えたのでは、生徒が正しいドゥーイング、なすべきことを本當になさないでしまふことが多い。そこで、きめのこまかいプログラムを与えようということになるのである。

プログラム方式というのがねらっているのはこの点であって、これ以上の所は実はまだこれから生み出すべきである。或は具体的な方法が生み出されないかも知れない。現在プログラムとして出ているのは或る一つの試みであって、それも出来そうな所を一つの実験としてやっているだけのことである。これはすべての教科についてそうであるが、国語の教育についても、そうである。

世間でプログラム学習は鑑賞指導にはむかないなどと結論的なこ

とを言う人がいるが、或はそうかも知れないし、そうでないかも知れない。それはこれからやってみなくてはならぬことである。やってみる時に大切なことは、プログラムというものを固定的に今出されているあの具体的なものにとらわれて考えないことである。ステップをふんでやるということは、何事も順序段階をふんでやるべきだということであって、それが現在とらわれているペーパーにあのわくをつくってやることだというように考えないことである。大事なことは、一人一人にドゥーイングをさせるといふことだけである。またプログラムでは出来ない、話し合いでなければ出来ないことがあるなどということも言われるが、そんなに簡単に結論を出さない方がよい。話し合いといつても五十人が全部で話し合っている時、一人一人がどれだけ考えて意見を出し、また人の意見を聞いて、自分の考え方とのちがいをはつきりさせているか。教師が指導して居るから、話し合いの結論は出るかも知れないが、それは一人一人の生徒が結論を出す活動をしたということにはならない。そうして、結論が出るのが大切なのでなく、一人一人の生徒がその結論を導き出す筋道をふむことができるということが大切なのである。そういう筋道もなんとかプログラムできなしかと考えてみる必要があるであらう。

## 二

わが国の国語教育は、読む、書く、綴る、話す、聞くなどというどの分野の教育も、言語の技術を身につけさせる訓練としてやるという意識が薄いようである。それが教科書の姿によくあらわれているし、またそれにたよってする授業にもよくあらわれている。例えば読むという分野をとりあげても、文が読めるようになる技術訓練をするような教科書ではない。ただ教科書にある文を読んで行くだけである。

読みものがならべられているだけである。だから授業になっても学級でみんなで行くということになる。みんなで行けばよいので、一人一人が読み方の技術を身につけるといふようになるのである。教科書も技術を次第に積みあげるといふこと、訓練を重ねるといふことになっていない。全然そういう系統がないわけではないがこれを使う教師にその意識が薄いせいもあって、漠然と教材にふれていくことになる。だからどの単元でも、文字を読んで、言葉のわけをやって、大意をとるといふことのくりかえしである。義務教育九ヶ年をそういう繰り返しをしている。そうして、いつもその時その時出て来た教材をそのように読むということにしかなくなってない。その教材が、全体の技術系列のどこに位置づいているかをはっきりおさえて訓練しているということにならない。そうしてその指導は、教師の意識はともすると、その教材の中味の方にとらわれてよく笑い話に言われるように、理科の授業になったり、社会科の授業になったりするるのである。

文を綴るなどということに至っては、全然教育はなされて居らないといつてもよい。もちろん一部熱心な教師の場合は別である。一般にいうのである。一年から九年まで、教えられることといえ、思った通り書くこと、見た通り書くこと、本当のことを書くことなどといったことである。そして生徒に用紙を与えて、書かせて、点をつけて返してやる。字の間違いを直す、テニヲハを直すといった程度である。一般に書かれたものよしあしに先生の目はむけられているが、書く技術は生徒には与えられないのである。よい作文を見ても、この子供は作文がうまいということであつて、それは生れつきの如きものである。非常にうまいと天才になるといった調子である。そこに至る技術を積みあげてやろうという考え方がないのである。結局文をつくる

などということも、名人芸に属することのようにならされていってよい。そして教育の仕事からはずされていくかの如くである。教えない方がよい、教えるは子供の独創性をのばさないなどという考え方もあるが、結果は一人の独創性を発見するために、万人をかたわにしているのである。また独創性というのは、子供が思いつきをつづっているなどということではない。やはり先人のものを身につけてのりこえるということにあるのである。

これは話すこと、聞くことという分野でも同様である。わが国では、話すこと、聞くことの訓練などということは、殆んど行なわれていない。教科書を使用して、読みの学習をやつていく間に、話し合いが行なわれているからそれですんでいるという考え方が圧倒的に強い。ことさら話す、聞くを抜き出して訓練するなどということはまず行なわれないといつてよい。それは一つには、そういう技術が分析されて、系統がつくられているということがないから行ないようがないのだともいわれる。だから話すといふと、いきなり応用動作である。教室の読みの授業の際話すなどといふのは或る意味で複雑な応用動作である。いきなりそういう所で、話をさせられるわけである。またそれは話の場としては一つの特異な場である。そういう時の話し方だけしかやっていないのでは狭すぎて問題にならない。道で一人の大人に会ったときの話は出来ないのである。

要するに、どの分野も、近代的な技術の教育としては非常におくれている。未分化のままなのである。だから結局は、教科書の教材をただ順々に読んで行くことのくりかえしに落ちつく。そしてそれを五十人で行つて行く。一人一人は余り真剣にやらなくてもよいように置かれていく。いつてみれば、五十分の一の責任しか持っていないわけである。最後は教師がまとめるのであるから、教師が一番責任をもって

真剣に読むということになる。多くの生徒は、一人一人をみると、教師が読んでいる何分の一か、何十分の一しか読んでいないのではないか。例えば、一つの文章段落の大意をとるとする場合も、一つ一つ文を読んで、その関係を考えて、必然的にかくあるべしという結論を出す活動を何人の生徒が責任をもってやっているであろうか。そのプロセスをいかげんにして、教師が出した結論を聞いても、それは読んだことにはならないわけである。結論が大切なのでなく、その結論を出すに至るプロセスを身につけることが大切なのである。そのプロセスが一つの技術なのである。その技術は文章の種類によって、様々なものがあるであろう。それらが分析されて、一つの系列をなして、その系列にしたがって訓練されて行かなくてはならぬのである。そういう技術の系列が自覚されて来ると、生徒の一人一人を訓練するという考え方もおこって来るであろう。恰も産業技術の訓練は一人一人に仕事をやらせなければならぬように、国語の教育も、一人一人を個別に訓練するという考え方が出て来るのではないか。

### 三

現在国語教育の分野でプログラムが作成されているのは、主として読解といわれる分野のものである。そして、それもまたある限られた方式で、例えば一文読みといったものが主流をなしている。これははじめにつくられたプログラムの例がそれであつたので、そういうものがプログラムだと思ひ誤られているのではないだろうか。まことに日本の教師は模倣性が強いというべきである。裏から言えば、獨創性がないのである。

しかし根本的に言うと、たとえ読解のプログラムであつても、全体の読解の技術の系列が明らかになつて、一年から九年まで、そのよう

にそれを積みあげることがはっきりしないでは、本当には出来ないのである。今はそういうものがないままに、教材にぶつかつた所でプログラムをつくっているのである、そういうことが、例えば三年でも、五年でも大してはちがわなないプログラムとなつていのである。それはプログラムの問題でなく、それ以前の問題である。いかえれば、教師はプログラムにするのは、一斉授業でやることを、一人一人にやるためにプログラムしたのである。プログラムに出た所は、一斉授業の中味なのである。その一斉授業は、実は三年でも五年でも大してかわつたことをやっていないのである。それがプログラムにあらわれるのである。その意味では、プログラムは、現在の一斉授業の本質が何であるかを極めて客観的に明らかにしたものということが出来る。そういうものを作つてみて、われわれは逆に国語教育のこれまでのあり方を反省することが出来るということである。

こういうように見ると、国語教育で考えなければならないのは、むしろカリキュラムである。プログラムをつくり得るように、プログラムによつて発展的に技術訓練をすることが出来るように、技術訓練としての国語教育の系列を科学的につくりあげることである。

このように考えると現在国語教育のプログラムが発発と同時に、形式化して、発展しないのは、これまでの国語教育の貧困さがつくりあげたものということが出来る。決してプログラムの問題ではない。プログラムは現在やっていることをきめ細かくして、それを一人一人にやらせるということだけを考へているのであつて、それ以上のある形式を要求するものではない。そういう根本的な考へ方から発発し直さなければならぬであろう。今出ているプログラムを検討することによつて以上のようなことが明らかになると思う。

さて、今後国語教育で基本的になさねなければならぬことは何であろうか。

まず第一に、現在の教科書を解体しなくてはならない。現在のような、薄いペラペラのを一年かかって読んでいるという如きことは、国語の力をつけることになるまい。読みものとして与えるのならば、その数倍のものが与えられなくてはならぬ。

しかしそれには、読みの技術が訓練されるような別の体系の教材が成立する必要がある。現在の教科書は文章を読んでいる中になんとなく技術を身につけるかも知れないが、わからないままに終わってしまう場合の方が多いのである。技術をちゃんと抜き出して、系列をおいて、訓練する必要があるのである。

これはしかし単に読むことについてだけではない。文を綴ることについてもまた同様である。話すこと、聞くことについても同様である。これらの分野もそれぞれ言語技術の系列として、はっきりカリキュラムができ教材がととのえられることが必要である。はじめに教科書の解体といったのは、実はこういう技術訓練の系列が成立することを、具体的な形で表現したのであって、本来はこのことが基本なのである。そういうことによつて、おのずから今の教科書は解体して、新しい教材の提出の仕方が生まれ出るようになる。

しかし以上のことは言うは易くして、行なうには相当の困難が伴うであろう。わが国にそういう伝統がないからである。そこで実際問題としては、現在のようにならざる所からプログラム方式によつて、技術の訓練を試みるのである。作文についても、現在の教科書の中にあるそのための教材と思われるものを使用して、作文の技術訓練をするプログラムを提示してみるのである。それによつて生徒を具体的にはどのような方式で訓練したらよいか次第にわかつて来

るであろう。話す、聞くというようなことについても同様である。

こういう営みを通じて、多くのプログラムが生まれ出て、その間の相互の関係が整理され、検討されることによつて、次第に全体的な言語技術教育の系列が見えて来るであろう。それを土台にして次第に言語技術のカリキュラムも成り立つのであって、こういう過程を経ないで、観念的にカリキュラムを編成することは危険である。つまりプログラムの具体的なものによつて、教育の内容を確かめつつ、全体計画を立て直すことが行なわれるべきであろう。プログラム方式は、そのような教育改善のための一つの方式であると考えべきなのである。

＞国立教育研究所＜